

# 1. 小松のあゆみ

## ◇歴史

小松で最古の人々が活躍したのは約2万年前で、八里向山遺跡から出土した尖頭器(石ヤリ)やナイフ形石器などによって、すでに人々が住んでいたことが分かった。弥生時代中期には既に稲作が行われ、北陸の文化交流の中心地として繁栄していたことが「八日市地方遺跡」に見ることができる。その後、漆町や一針町など梯川流域平野にたくさんの集落が誕生し、平安時代には加賀国の中心である「国府」が古府町付近の小高い地に置かれ、「中宮八院」なども歴史に登場した。

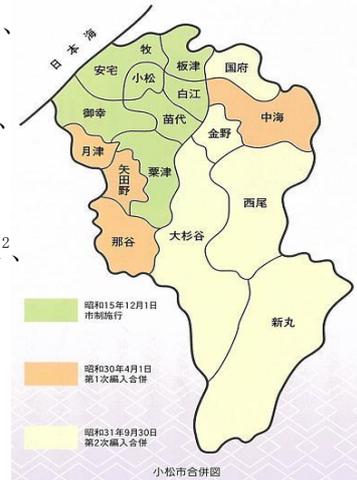
現在の市街地の形成は、文明18(1486)年、絹織物の生産をしていた本折に見え、小松城は天正4(1576)年、一向一揆の首領・若林長門守が砦を再築したことに始まる。市街地は相次ぐ戦火を受け、城主も幾度となく変わったが、寛永17(1640)年、加賀前田家三代利常が小松城に隠居して内政を整え、殖産興業に意を注ぎ、城下町として急速に発展した。利常には今もってなお畏敬の念が払われ、「中興の祖」と呼ばれている。

明治22(1889)年、町村制の実施により小松と安宅が町となり、昭和15(1940)年12月1日、小松町・安宅町・牧村・板津村・白江村・苗代村・御幸村・栗津村の2町6か村(面積:91.07km<sup>2</sup>、人口:51,522人)が合併して市制が敷かれた(全国176番目)。

昭和30(1955)年4月1日、矢田野村・那谷村・月津村(柴山を除く)及び中海村を編入合併(第1次編入合併 面積:154.26km<sup>2</sup>、人口:73,074人)した。

昭和31(1956)年9月30日、金野村・西尾村・新丸村・大杉谷村・国府村(和気等を除く)を編入合併(第2次編入合併 面積:372.75km<sup>2</sup>、人口:88,707人)し、現在の市域になった。

昭和45(1970)年、三湖干拓事業によって面積は374.72km<sup>2</sup>に増加したが、昭和63(1988)年10月1日に371.13km<sup>2</sup>と統一された。国土交通省国土地理院が平成27(2015)年3月に公表した「平成26年全国都道府県市区町村別面積調」により、小松市の面積が371.05km<sup>2</sup>(平成26(2014)年10月1日)に変更となった。これは、面積の計測方法が変更されたこと及び計測の基礎となる地図が最新のデジタル地図(電子国土基本図)に切り替えられたことによる。



## ◇地名の起こり

「小松」の地名が文献に載るのは、鎌倉時代にまでさかのぼるが、確実なところは戦国時代に入ってからである。

伝説では、平安中期にさかのぼり、花山法皇(天皇在位984-986年)が北陸巡幸の折、現在の園町付近に稚松を植えられたことから、いつしか「園の小松原」といわれて地名になったとされている。

また、「小松殿」や「小松内府」と称された平清盛の長子の平重盛が建立し、仁安2(1167)年から天正3(1575)年頃まで存在した「小松寺」の寺号にちなむものともいわれている。

## ◇小松市の年表

旧石器	2万年前	能美丘陵で狩猟生活を営む人々の集落(八里向山遺跡群)
縄文	1万2千年前	月津台地に狩猟生活を営む人々の集落(念仏林遺跡)
	6,000年前	温暖化で海水面が上昇、加賀三湖の原型できる。
	5,000～4,000年前	加賀三湖や梯川で漁労活動盛ん(念仏林遺跡、六橋遺跡)
弥生	紀元前4世紀	低湿地に稲作が行われる(八日市地方遺跡)
	弥生後期	青銅器生産を行う(一針B遺跡)
古墳	300年	前方後円墳が築かれる(河田山古墳群)
	500年	南加賀地方で須恵器生産が始まる(南加賀古窯跡群) 人物埴輪など配列した古墳(矢田野エジリ古墳)
飛鳥	600年	鉄生産が始まる(南加賀製鉄遺跡群) 渡来人の集落が営まれる(額見町遺跡)
	7世紀末	越前、越中、越後の国が成立し、小松は越前国に組み込まれる
奈良	奈良時代初頭	泰澄大師が白山を開き、那谷寺・粟津温泉を開いたと伝えられる この頃、須恵器生産盛ん(南加賀古窯跡群)
平安	823年	越前国から分かれて加賀国ができる
	841年	加賀国に国分寺が置かれ、勝興寺を充てる
	908年	式内社が定められる(多太、菟橋、幡生、滓上、石部神社、気多郷子神社)
	986年	花山法皇がこの地に御巡幸された伝承がある(園の館、那谷寺、御幸塚など) 白山信仰が次第に盛んになり、この地方に中宮八院、白山三か寺などの寺ができる
	1176年	原の仏御前が平清盛に仕える。涌泉寺事件が起きる 加賀中世窯業(加賀古陶)が作られる
	1183年	篠原の合戦。斉藤実盛のかぶとを多太神社に寄進
鎌倉	1187年	源義経一行が安宅の関を通ったと伝えられる
	1221年	順徳上皇が佐渡へ御幸の途中、小松を通られた この頃、加賀古陶盛んになる
室町	1445年	富樫泰高が御幸塚城を構える
	1449年	本願寺の蓮如が北陸を巡った
	1471年	蓮如が吉崎御坊を建てた。この地方に浄土真宗を布教する
	1488年	小松・本折・安宅・千代・波佐谷・岩倉など一向一揆側の城(砦)が作られた
	1564年	越前の朝倉氏が攻め入り、小松・本折城などを焼く
安土桃山	1575年	織田信長が加賀に攻め込む
	1576年	若林長門守(一向一揆の将)が小松城を再築

安土桃山	1582年	一向一揆勢力が滅ぼされる	
	1583年	村上義明が小松城主となる	
	1598年	丹羽長重が小松城主となる	
	1600年	浅井暲の戦いが起こる。前田利長は加賀、能登、越中三か国の領主となる(居城は金沢城)。小松は前田領となる	
江戸	1640年	前田利常が小松城に隠居し、整備した。街の整備、寺社の造営、産業振興、農制、文化振興などに尽くした	
	1642年	前田利常が那谷寺再建完了	
	1644年	葭島神社が建てられた	
	1651年	菟橋神社を建て直した	
	1656年	改作法が出来、村々へ「村御印」を渡す この頃、九谷焼始まる	
	1657年	前田利常が小松天満宮を建てた	
	1658年	利常が亡くなり、小松城には城代、後に城番を置く	
	1666年	小松絹の判賃を値上げ	
	1678年	御定書(二日読)を村・町に渡す	
	1689年	松尾芭蕉が北陸に来た	
	1705年	金沢・小松間に飛脚が始まる	
	1768年	加賀に百姓一揆がおこる	
	1770年	加賀の寺院騒動がおこる	
	1772年	沢村源次が金平金山を開く	
	1766年	この頃、曳山が興ったと考えられる	
	1794年	小松学問所(集義堂)ができる	
	1805年	林八兵衛が若杉窯を開く	
	1811年	若杉窯で本多貞吉が磁器を焼き始める	
	1819年	小野窯が始められる	
	1839年	害虫が発生し、稲が荒らされる(虫塚できる)	
	1847年	蓮代寺窯が始められる	
	明治	(5年) 1872年	石川県となる。小学校が開かれる。小松城を取り壊す 小松郵便局ができる
		(10年) 1877年	小松区裁判所、小松警察署ができる
		(11年) 1878年	能美郡役所を小松に置く
		(17年) 1884年	小松税務署ができる
		(22年) 1889年	小松、安宅が町になる(町村制の実施)
(30年) 1897年		福井～小松間鉄道開通	
(31年) 1898年		小松～金沢間鉄道開通。小松～高岡間鉄道開通	
(39年) 1906年		芦城公園(小松城三の丸跡)が完成	
(41年) 1908年		小松町に電話が開通	
(43年) 1910年		初めて電灯600余がついた	

大正	(元年)	1912年	梯川が下牧より安宅河口に直流する
	(5年)	1916年	栗津温泉～新栗津間温泉電軌開通
	(8年)	1919年	尾小屋鉄道開通
昭和	(4年)	1929年	小松～鶴川遊泉寺線電車開通
	(5年)	1930年	小松の大火(橋北約700戸消失)
	(7年)	1932年	小松の大火(橋南約1,100戸が焼失した)
	(9年)	1934年	手取川、梯川大洪水
	(12年)	1937年	小松に上水道ができた
	(15年)	1940年	2町6か村が合併し、小松市制が敷かれる(全国176番目)
	(16年)	1941年	市章、市歌制定
	(19年)	1944年	小松飛行場完成。大和善隣館建設
	(22年)	1947年	芦城公園に軟式野球場完成。昭和天皇小松に御巡幸
	(25年)	1950年	小松市民病院開院(東町)
	(26年)	1951年	市庁舎完成
	(29年)	1954年	加賀三湖干拓事業起工
	(30年)	1955年	第1次編入合併。小松～大阪便就航
	(31年)	1956年	第2次編入合併。国道8号線寺井から小松、栗津間開通
	(32年)	1957年	市立小松病院完成(相生町)。小松飛行場の米軍基地閉鎖
	(34年)	1959年	公会堂完成。三日市、八日市大火
	(36年)	1961年	小松空港北陸エア・ターミナル落成 小松基地航空自衛隊開庁
	(37年)	1962年	産業と防衛大博覧会「小松博」開催。尾小屋鉱山閉山。 総合卸売市場完成。栗津温泉電車廃止
	(38年)	1963年	38豪雪。ドーム型市体育館完成。小松～東京便就航。 北陸線福井～金沢間複線電化。
	(41年)	1966年	大倉岳高原スキー場開場
	(42年)	1967年	大日川ダム完成。小松～札幌便就航
	(44年)	1969年	三湖干拓完成。市営斎場完成
	(45年)	1970年	市民ホール・博物館落成
	(46年)	1971年	梯川1級河川に。武道館完成
	(47年)	1972年	北陸自動車道金沢西～小松間開通。軽海団地造成完了。 スザノ市(ブラジル)と姉妹都市提携
	(48年)	1973年	大杉青年の家開館
	(49年)	1974年	ビルボード市(ベルギー)と姉妹都市提携。千松閣完成
	(52年)	1977年	尾小屋鉄道廃止
	(53年)	1978年	赤瀬ダム完成 小松～福岡便就航
	(54年)	1979年	加賀産業開発道路小松～金沢間開通。小松～ソウル便就航
	(55年)	1980年	市制40周年を記念して、市の木「松」、市の花「梅」を制定
	(56年)	1981年	56豪雪。九谷の里完成。市立図書館開館 安宅海浜公園完成

昭和	(57年)	1982年	木場潟公園開園	
	(58年)	1983年	南加賀公設卸売市場完成。少年自然の家オープン。環境美化センター完成。昭和天皇御行幸。県九谷焼試験場完成	
	(59年)	1984年	市民センター完成。小松総合体育館完成。 小松－仙台便就航	
	(60年)	1985年	南消防署、南支所新庁舎完成。サン・アビリティーズ完成	
	(61年)	1986年	北陸鉄道小松線(小松～鶴川遊泉寺)廃止	
	(62年)	1987年	安宅漁港開港。勸進帳小松800年祭開催	
	(63年)	1988年	新市庁舎完成。小松短期大学開学。憩いの森オープン 名誉市民に勝木保次博士。明峰駅開業	
	平成	(元年)	1989年	小松市民病院移設新築(向本折町)
		(2年)	1990年	市制50周年記念事業開催。本陣記念美術館完成 桜木体育館完成
(3年)		1991年	石川国体開催。小松－那覇便就航。ゲイツヘッド市(イギリス)と姉妹都市提携。	
(4年)		1992年	国民文化祭石川県で開催。河田山古墳群史跡資料館完成。末広屋外水泳プール完成	
(5年)		1993年	名誉市民に二代浅蔵五十吉氏	
(6年)		1994年	カーゴルックス航空の国際貨物定期便就航 すこやかセンター完成	
(7年)		1995年	こまつ看護学校開学。県立航空プラザ開館	
(8年)		1996年	中ノ峠ミュージック・ラボオープン	
(9年)		1997年	ロシアタンカー流出重油安宅海岸に漂着。仙叟屋敷ならびに玄庵完成。こまつドームオープン。芦城センター完成。 名誉市民に千宗室氏。国際色絵陶磁器フェア開催(ドーム)	
(10年)		1998年	男女共同参画都市宣言。名誉市民に三代徳田八十吉氏。 小松駅前立体駐車場オープン	
(11年)		1999年	新消防庁舎完成。第1回全国子供歌舞伎フェスティバル in 小松開催。名誉市民に本陣甚一氏	
(12年)		2000年	宮本三郎美術館開館。せせらぎの郷オープン。 市制60周年記念事業	
(13年)		2001年	環境基本条例制定。日野車体操業開始	
(14年)		2002年	小松市まちづくり計画策定。カヌーワールドカップ開催。鉄道高架橋完成、新小松駅舎完成	
(15年)		2003年	国道8号小松バイパス全線開通。世界ジュニアカヌー選手権大会開催	
(16年)		2004年	小松駅周辺整備事業完了。石川県こまつ芸術劇場うららオープン。アテネオリンピックカヌー競技アジア予選開催。小松－上海便就航	
(17年)		2005年	勸進帳ものがたり館オープン	

平成	(18年) 2006年	空とこども絵本館オープン。 市民交流プラザ「The MAT'S」オープン
	(19年) 2007年	能登半島地震発生(震度6強、小松で震度4)
	(20年) 2008年	リサイクルセンターオープン。小松ー台湾便就航 末広野球場(弁慶スタジアム)リニューアルオープン 中国・済寧市と姉妹都市提携
	(21年) 2009年	芦城公園拡張工事完了。 ゲイツヘッド市(イギリス)に日本庭園を造成
	(22年) 2010年	埋蔵文化財センターオープン。道の駅「こまつ木場潟」オープン。市制70周年記念事業
	(23年) 2011年	こまつの杜オープン。八日市地方遺跡出土品が国重要文化財。環境王国に認定。小松加賀斎場「さざなみ」オープン
	(24年) 2012年	里山自然学校大杉みどりの里オープン。 南加賀急病医療センターオープン
	(25年) 2013年	EVバスの運行開始 こまつ曳山交流館「みよっさ」オープン 「空の駅こまつ」オープン
	(26年) 2014年	「サイエンスヒルズ小松」グランドオープン
	(27年) 2015年	第66回全国植樹祭(木場潟)
	(28年) 2016年	「『珠玉と歩む物語』小松～時の流れの中で磨き上げた石の文化～」が日本遺産に認定 曳山子供歌舞伎250年本祭
	(29年) 2017年	那谷寺開創1300年祭、白山開山1300年神式大祭。 里山健康学校・せせらぎの郷リニューアルオープン 小松天満宮浮島化工事完成 Komatsu A×Z SQUAREがオープン。1階にカブッキーランド開設。
	(30年) 2018年	公立小松大学開学 金野・西尾・波佐谷3小学校を統合し、小松市立松東みどり学園誕生 日本遺産「荒波を超えた男たちの夢が紡いだ異空間～北前船寄港地・船主集落～」に小松市が追加指定 「エコロジーパークこまつ・クリーンセンター」稼働 粟津温泉開湯1300年祭
令和	(元年) 2019年	「九谷セラミック・ラボラトリー」オープン SDGs未来都市に認定
	(2年) 2020年	「里山みらい館」オープン。小松市制80周年記念式典
	(3年) 2021年	コマツの創業100年事業「遊泉寺銅山ものがたりパーク」完成

## 2. 遺 跡

### ◇小松市の遺跡 分布図



- ① 八里向山遺跡群(上八里・下八里町辺)
- ② 念仏林遺跡(四丁町辺)
- ③ 八日市地方遺跡(日の出町辺)
- ④ 矢田野エジリ古墳(矢田野町辺)
- ⑤ 額見町遺跡(額見町辺)
- ⑥ 南加賀古窯跡群(二ツ梨町・戸津町・林町辺)
- ⑦ 河田山古墳群(国府台辺)

### ◇主な遺跡の年表

年代	時代	日本の動き	本書に出てくる遺跡
紀元前 15000	旧石器	氷河期 石器による猟期生活 ※岩宿遺跡(群馬県)	八里向山遺跡群 … ①
	縄文	土器の発明・弓矢の使用 狩猟・採集・漁撈生活  ※桜町遺跡(富山県) ※三内丸山遺跡(青森県)	念仏林遺跡 … ② 山崎遺跡 六橋遺跡
紀元前 400	弥生	稲作の始まり 鉄器・青銅器の伝来  ※池上曾根遺跡(大阪府) ※吉野ヶ里遺跡(佐賀県)	八日市地方遺跡 … ③ 梯川鉄橋遺跡 吉竹遺跡
300	古墳	古墳の出現	
		近畿地方を中心に大きな政治勢力発生(大和朝廷)	千木野遺跡 河田山古墳群 … ⑦
400		※百舌鳥大山古墳(仁徳天皇陵・大阪府) 須恵器生産開始	埴田後山古墳群
500		仏教伝来	三湖台古墳群 矢田野エジリ古墳 … ④
600	古墳	中央政権の確立 ※藤ノ木古墳(奈良県) ※飛鳥寺・法隆寺 ~飛鳥文化 国家制度の設備 ※645年 大化の改新	念仏林南遺跡 額見町遺跡 … ⑤
		700 710	奈良
794		平安京に都が置かれる	
1185	平安	平氏政権全盛を迎える 源頼朝、平氏追討のため伊豆で挙兵	漆町遺跡群 高堂遺跡 古府遺跡群(国府推定地) 浄水寺跡 中宮八院
		1336	鎌倉
1568		室町	足利尊氏、室町幕府を開く ※1467年 応仁の乱
1603	江戸	安土・桃山	織田信長入京  ※1600年 関ヶ原の戦い
		徳川家康、江戸幕府を開く	渡佐谷城跡 小松城跡

## 旧石器時代

### ① 八里向山遺跡群

上八里・下八里町の集落から、北方へ鍋谷川をはさんで望む丘陵地にある。現在は、八里台住宅団地となっているが、ここに県内でもまれにみる豊富な内容を誇る遺跡群がある。時代は旧石器時代から中世にまで至り、この遺跡群だけで年表がつくれてしまうほどである。

内容も、集落・古墳・窯跡・寺院跡・中世墳基群といった遺跡種別のほとんどが顔をそろえている。

八里向山遺跡で発見された旧石器時代の石器は、関東地方や関西地方の影響がみられ、2万年前の人々は列島の広い範囲を狩りをしながら移動していたことがわかる。



石器



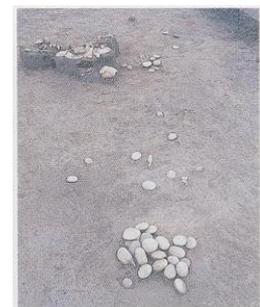
発掘の様子

## 縄文時代

### ② 念仏林遺跡

縄文時代中期の集落跡で、この遺跡では、長円形に竪穴住居跡4軒が確認され、弓矢の先に付ける矢じりを含め約5,340点の石器類が見つかった。1つの竪穴住居跡からは、多くの石錘(石のおもり)やその未製品・石を割った時に出る石のかけらが集中して見つかった。

石錘は漁撈に使った網のおもりとしての役目をするもので、魚を捕るために石で道具をつくり、魚を捕っては糧としていた生活の姿がうかがえる。また、この時代の海岸線は現在よりもかなり内陸に入っていたと思われ、念仏林遺跡も絶好の漁場となる入り江に面していたと考えられる。



石錘の集中

## 弥生時代

### ③ 八日市地方遺跡



絵画土器

昭和5(1930)年、地主の後藤長兵衛氏が水田から2個の石器を発見したことを契機として、早くから知られていた遺跡の一つ。弥生時代中期の「小松式土器」の標識遺跡ともなっており、学術的にも貴重な物である。遺跡は約16万㎡を超える範囲に広がる弥生時代中期の低湿地集落で、ちょうどJR小松駅の東側に位置している。

井戸や墓(方形周溝墓)、住居跡、川跡等が見つかっており、また土器、石器、玉造り関連遺物、そして農具や紡織具、容器など様々な用途の木製品が大量に出土している。また、絵画土器や魚形木製品など祭祀に関係する特殊な置物も多い。それは、近隣の弥生時代遺跡とは一線を画す質と量で、北陸の中核的な集落であったことを物語っており、小松だけにとどまらず、全国的に注目を浴びている遺跡でもある。平成23年に遺跡より出土した弥生時代遺物(一括)が国指定重要文化財に指定された。

また、平成29(2017)年には、北陸新幹線工事に伴う発掘調査で、東アジア最古となる柄付き鉄製ヤリガンナ(木を削る道具)が発見され、大きな話題となった。



柄付き鉄製  
ヤリガンナ

## 古墳時代

### ④ 矢田野エジリ古墳



出土した埴輪

6世紀に造られた、全長30m程度の小さめの前方後円墳。粟津駅に程近い住宅地で発見された。現在、春日町の公民館が建っているすぐ横にある。

もともとは土を高く盛り上げた墳丘があったが、調査時にはすでに削り取られてしまっていた。周りには、幅2~3m、深さ0.5~1mの周溝という溝がとりまいていて、そこからたくさんの埴輪・土器などが出土した。死者へのお供え物の埴輪が墳丘の周りから落ちたと考えられている。

エジリ古墳の埴輪には、人物埴輪や馬形埴輪という特殊な埴輪などが含まれており、また、全国にも例のない馬にまたがる人物が、馬子や馬とともにセットで出土した。これにより、埴輪の本場から遠く離れたこの埴輪群は、一躍全国の研究者たちの注目を集めたのである。平成9(1997)年には、細かい破片まで含めて全て国の重要文化財に指定され、名実共に、全国に誇れる小松の文化財になった。しかし、残念ながら、現在は宅地となり古墳を見ることはできない。

## ⑦ 河田山古墳群

小松市東部の加賀産業開発道路沿いに住宅団地「国府台」がある。ここは、かつては起伏に富んだ丘陵で「河田山」と呼ばれ、総数65基からなる古墳群や弥生時代の高地性集落跡、奈良時代の須恵器の窯などがあった。昭和61(1986)年・62(1987)年にこの団地造成工事に伴う調査が行われ、55基の古墳が発掘された。(4～7世紀、10基は現状保存)



古墳公園全景

特に注目を集めたのは、丁寧に加工した凝灰岩を積み上げて造られた「切石積横穴式石室」をもつ12号墳(一辺15mの古墳、7世紀中葉)だった。これは天井がアーチ形となる全国にも珍しいもので、朝鮮半島南部の王墓おうぼに系譜がたどれることから、渡来系の有力者のお墓ではないかと考える意見もある。当時、全国の研究者や市民・県民から遺跡保存の要望が出され、石室は基盤ごと移築され、墳丘が復元されて住時の姿をのばせている。



河田山 12号墳

古墳公園に隣接した史跡資料館は河田山の発掘調査の成果だけでなく「古墳時代」を広く理解できるように展示・解説がなされ、解体された33号墳の切石積横穴式石室も復元されている。河田山33号墳の石室は、凝灰岩の切石積横穴式石室である。玄室の内法は、幅が奥壁部分で200cm、長さが石室中央で326cmであり、面積は6.25㎡である。玄室と羨道との境の玄門には、框石があり、この部分の幅は123cmである。前庭部は、自然石を積み上げている。

## 飛鳥～平安時代

### ⑤ 額見町遺跡

飛鳥・奈良時代～平安時代の遺跡で、遺跡範囲が25万㎡を超える大規模集落遺跡。この額見町の地は、古代越前国江沼郡額田郷だったのではないかと推定されている。

飛鳥～平安時代にかけての複合遺跡で、確認されている住まいの跡はかなり重なっており、これまで行われた調査では竪穴住居跡が120棟、堀立柱建物跡が330棟密集して見つかっている。これは長い年月に渡っ

て、この土地で生活が営まれてきた証拠である。発掘調査では、オンドル状遺構と呼ぶL字形の、その時代の通常とは違う形態のカマドが備わった住居跡が23棟見つかっている。このL字形カマドは暖房効果を備えており、朝鮮半島のオンドルと同じ役割をもつものと思われることから、朝鮮半島から移住してきた渡来人の存在がうかがえる。



L字形カマドをもつ竪穴住居跡

### ⑥ 南加賀古窯跡群

南加賀古窯跡群では県内でもっとも早く窯業生産を開始した。この時期の焼物は、須恵器と呼ばれる陶器質の焼物で、5世紀に朝鮮半島から穴窯焼成技術とともに伝播したものであり、北陸へは、5世紀末から6世紀初め頃、畿内の須恵器生産地から技術伝播している。須恵器は食器が主だが、壺や大甕のような大型品もあり、主に祭りに使われたり、古墳に副葬されたりするなど、高級な焼物として使われている。



発掘現場

7世紀になると、窯場が戸津・林地区と那谷・分校地区の2カ所に分かれたり、陶棺や硯などの特殊な用具を生産するなど大きな変革期を迎えた。また、須恵器の形も現代のお茶碗の形に近くなり、壺や甕の形も実用的な形に変化した。生産量も増加し、一般の村々に須恵器が普及するようになったのである。

8世紀前半には、南加賀古窯跡群としての窯場を拡大し、須恵器生産と一体に土師器生産を行うなど、古代土器生産としての全盛期を迎えた。須恵器窯はこれまで確認できたもので約205基、土師器生産土坑は約75基を数え、窯場は6地区、35支群にもものぼる。北陸では最大規模をもつ古代土器生産地帯である。

### 3. 小松城

丸の内町にある梯郭式平城。天正4(1576)年、織田信長の加賀侵攻に備えるため加賀一向一揆勢の若林長門守によって築かれたといわれ、天正7(1579)年、織田信長の命を受けた柴田勝家が、加賀一向一揆勢を鎮圧すると、村上義明、次いで丹羽長重の居城となる。慶長5(1600)年、関ヶ原の戦いで豊臣方(西軍)に属した長重は、合戦後改易となり、小松城は加賀前田家二代利長の所領となって利長義兄の前田長種が城代として入城した。

元和元(1615)年の一国一城令で小松城は一旦廃城となるが、寛永16(1639)年、加賀前田家三代利常の隠居城として例外的に幕府から認められ復活した。

梯川の蛇行によって造られた沼地を利用し、川の水を引き入れた堀の中に8つの島が兵法に従って配置されている。利常は大修築を施し、本丸、二の丸を堀で囲み、その周囲に三の丸、枇杷島、中土居、葎島(芦島)の四郭、さらにその周囲に牧島、愛宕、後三の丸、竹島など六郭を巡らせた。面積は金沢城の倍近い約56万㎡、堀は面積の約30%の約17万㎡であった。巨大な湖沼に浮かぶ12の島を石橋、木橋で連結した全国でも珍しい浮城(俗に「小松の浮城」)である。また、守山城、金沢城、小松城が北東(鬼門)のライン上に合わさるように巧みに縄張りされ、それぞれの島は独立した曲輪として石垣と土塀で厳重に防備が施されていた。表向きは隠居城であるが、その規模と防備の固い曲輪配置から考えると、有事の際の金沢防衛のための城だったかもしれない。



現在の地図に落とした小松城の位置



本丸櫓台付近拡大図



小松城配置図

本丸中央には、五重天守閣が余裕で建つほどの、ほぼ10間四方(東西20m、南北18m、高さ6.3m、仰角82度の傾斜)という大きな天守台石垣(櫓台)が造営された。しかし実際に天守台上に建てられたのは、二層三階の櫓が建てられた。三階となる上の層の内部には座敷が設けられ、その上の大屋根は寄棟の柿葺き。一・二階の下の層は壁面外回りを葦簀で囲んだ日本で唯一の数寄屋風な建物である。

また、利常は小松城の整備を行うなかで作庭にも力を注ぎ、領内から竹木・石を調達し、城内で大がかりな作庭も進められた。慶安元(1648)年には葎島に亭・花畑が完成し、承応元(1652)年には千利休と小堀遠州の教えを取り入れた「山崎の御教奇屋」(茶室)が葎島に建てられた。京都の桂離宮の整備を支援するなど、文化を重んじた利常の美意識が城造りにも色濃く投影されている。



復元模型図(小松市立博物館) 縄張模型図(小松市立博物館)

天守台石垣は、築城技術がピークに達した時期に築かれただけに、精巧に積まれた石垣は見事である。直線的に加工した石材をブロック状に積み上げる「切込接」と呼ばれる工法は、石を削ってきれいに整形して積む工法で、高く急角度の石垣を築くことができ、見た目も洗練されて美しい。一方で手間と費用が膨大となるため、徳川将軍家とごく一部の大名しか採用できなかったものだという。

小松城の石垣の重要な部分には良質な金沢の戸室石を用い、その他の部分には、蓮代寺、長谷、鶴川より切り出した石を使用している。赤みがかった石、青みのある石、白っぽい石のコントラストがとても美しいこの石垣にも、利常の美意識が反映されている。



本丸櫓台石垣



本丸櫓台石垣



きりこみはぎ  
切込接

利常は、万治元(1658)年に亡くなるまで小松城で過ごす、その後は城番が置かれ、明治維新まで城は存続する。明治5(1872)年に廃城となり、城内の建造物は入札によって払い下げられ、土地開発の名目で石垣は崩され、堀は埋められ、由緒ある銘木大樹は伐採された。

城域であった地は現在、小松市役所(竹島)、芦城公園(三の丸跡)、小松高校(二の丸跡)として開発されており、城の面影はほとんどない。小松高校のグラウンド(本丸跡)の隅に天守台と内堀跡の石垣が残るのみである。

建造物としては、「鰻橋御門」が小松市園町の来生寺寺門に移築され現存し、「兎御門扉」及び「葭島御殿兎門扉」が金沢市兼六園内の成巽閣で、「二階御亭入口扉」が小松市立博物館で、それぞれ保管されている。



常盤門(稚松小学校)



鰻橋御門(来生寺)



芦城公園(三ノ丸跡)

#### ☆主な沿革

- 天正4(1576)年 加賀一向一揆方の若林長門守によって築城された。
- 天正7(1579)年 柴田勝家に攻められ落城、村上義明が城主となる。
- 慶長3(1598)年 村上義明に替わり、丹羽長重が入城した。
- 慶長5(1600)年 関ヶ原の戦いにおいて西軍に属した丹羽長重が改易され、前田利長の所領となり城代が置かれた。城代は利長の義兄の前田長種。
- 元和元(1615)年 一国一城令により廃城となる。
- 寛永16(1639)年 前田利常の隠居城として再築され、石垣の構築、二の丸三の丸の増築等、大規模な改修が加えられた。
- 万治元(1658)年 利常が没し、以降明治まで城番が置かれ維持された。
- 明治5(1872)年 廃城となる。

## 4. 丹羽長重（1571年～1637年）

七転び八起きで戦国時代をのりきる **江戸時代**

### ◇略歴

元龜2(1571)年織田氏の家臣・丹羽長秀<sup>なぐひで</sup>の長男として生まれる。主君・織田信長の死後は、父・長秀とともに羽柴秀吉<sup>はしばひでよし</sup>(後の豊臣秀吉<sup>とよとみひでよし</sup>)に従い、天正11(1583)年の賤ヶ岳<sup>しずがだけ</sup>の戦いや天正12(1584)年の小牧・長久手の戦い(病床にあった父の代理)に出陣した。



大正13(1585)年に父長秀が死去し、越前国・若狭国・加賀国2郡123万石を相続したが、同年の佐々成政の越中征伐に従軍した際、家臣に成政に内応したものがいたとの疑いをかけられた。そのため羽柴秀吉によって越前

国・加賀国を召し上げられ、若狭1国15万石となり、さらに重臣の長束正家<sup>なつかまさいえ</sup>や溝口秀勝<sup>みぞぐちひでかつ</sup>、村上頼勝<sup>むらかみよりかつ</sup>らも召し上げられた。

さらに天正15(1587)年の九州征伐の際にも家臣の狼藉を理由に若狭国も取り上げられ、わずかに加賀国松任4万石の小大名に成り下がった。これは、秀吉が丹羽氏の勢力を削ぐために行った処置であるといわれている。

その後、小田原征伐や朝鮮出兵などの功により、慶長3(1598)年加賀國小松12万石に加増され、このときに従三位、参議・加賀守に叙位・任官されたため、小松宰相と称された。同年に秀吉が死去すると、徳川家康から前田利長監視の密命を受けている。

慶長5(1600)年、関ヶ原の戦いでは西軍に与して東軍の前田利長と戦ったため(浅井暁の戦い)、戦後にいったん改易となる。慶長8(1603)年に常陸国古渡1万石を与えられて大名に復帰し、慶長19(1614)年からの大坂の陣では武功を挙げたため、元和3(1617)年、徳川將軍家二代秀忠の御伽衆に抜擢される。元和5(1619)年に常陸国江戸崎2万石に加増移封された。元和8(1622)年には、陸奥国棚倉5万石に加増移封される。そして寛永4(1627)年、10万石で陸奥国白河に加増されて初代藩主となり、白河城を築いた。

また築城の名手でもあり、奥州の要衝に配されたのも城下町整備や伊達政宗への備えという使命を帯びてのことであった。度重なる築城により丹羽家の財政は逼迫した。

寛永14(1637)年閏3月6日に死去した。享年67(満65歳没)。跡を子の光重が継いだ。

### 浅井暁の戦い

北陸における「関ヶ原の戦い」として、慶長5(1600)年に東軍方の金沢城主・前田利長と、西軍方の小松城主・丹羽長重が大領野(小松市の大領町から南浅井町一帯)で戦った。

慶長3(1598)年8月、天下統一を果たした豊臣秀吉が亡くなると、徳川家康の独断専行が目立つようになったことで豊臣政権内に対立が起き、慶長5(1600)年7月、石田三成が家康打倒の兵を挙げ、同年9月には、家康率いる東軍と三成率いる西軍との関ヶ原の戦いへと至った。

こうしたなか、前田利長は徳川方につき、慶長5(1600)年7月26日、石田方を抑えるべく

上方へ向けて金沢から出陣。このとき、小松城では丹羽長重、大聖寺城では山口宗永・修弘父子が敵対しており、利長は上方へ向かう途中、攻め難い小松城は攻めずに兵を進め、大聖寺城を8月3日に攻略。8月5日には越前の金津付近(福井県あわら市)まで進軍した。ところが、そこで利長の軍勢は金沢へ引き返す。その理由は諸説あるが、石田方の大谷吉継の軍勢が金沢を攻撃するとの情報が入ったためともいわれている。

利長の軍勢が金沢へ戻る途中の8月9日の朝、大領野(小松市の大領町から南浅井町一帯)へ差し掛かったところで、軍勢の殿(最後尾で敵の追撃に備える部隊)を務めていた長連龍の部隊に対し、小松城の長重の部隊が攻撃を仕掛けた。これが浅井畷の戦いである。長連龍の部隊が苦戦していたところへ救援部隊が加わり、双方にかなりの被害が出たところで丹羽軍が撤退して戦いが終わった。

この戦いののち、長重が利長との和議を申し入れ、9月18日、相互に人質を入れることとなり、前田家からは利長の異母弟で、それまで越中守山城(富山県高岡市)にいた8歳の猿千代(後の前田利常)が人質として小松城に入った。

なお、この和議が成立したときには、すでに9月15日の関ヶ原の戦いで徳川方が勝利しており、猿千代の人質としての生活はほどなくして終わった。長重は人質の猿千代をわが子のように可愛がったといわれている。

## 5. 前田 利常 (1593年～1658年)

小松が誇る貴重な文化遺産や産業の礎を築いた小松発展の祖ともいえる人物 江戸時代

### ◇略歴

文禄2(1593)年11月25日生。加賀前田家三代。前田利家の四男(幼名・猿千代)で母は側室千代(寿福院)。利家の56歳の時の息子。幼少の頃は越中守山城代の前田長種のもとで育てられる。

慶長5(1600)年、関ヶ原の戦い直前の浅井暉の戦いの際、西軍について小松城の丹羽長重の人質となった。長重が西軍敗北のため東軍に講和を望んだためである。同年、跡継ぎのいなかった兄・利長(加賀前田家二代)の養子となり、名を利光とし、徳川将軍家二代秀忠の娘・珠姫を妻に迎えた(利常9歳、珠姫3歳)。



慶長10(1605)年、利長は隠居し、利常が前田家の家督を継いだ(利常12歳)。慶長19(1614)年、慶長20(1615)年には大坂の陣の冬・夏両陣にも従軍している。冬の陣の際には真田信繁隊と激戦を繰り広げた(真田丸の戦い)。

寛永6(1629)年、諱を利光から利常と改める。寛永8(1631)年、利常に対する謀反の嫌疑(寛永の危機)をかけられるが、寛永10(1633)年、嫡男光高の正室に家光の養女・大姫(水戸徳川家初代頼房の娘)を迎えることで徳川家との関係を深くして危機を乗り越え、加賀藩102万5千石余の安泰を図った。

寛永16(1639)年、嫡男光高に家督を譲るとともに、次男利次に富山藩10万石を、三男利治に大聖寺藩7万石を分封し、20万石を自らの養老領として小松に隠居した(利常46歳)。

正保2(1645)年4月、光高が急死し、跡を継いだ綱紀が3歳とまだ幼かったことにより、6月に徳川将軍家三代家光からの命令で綱紀の後見人として藩政を補佐した。利常は治世の間、常に徳川将軍家の強い警戒に晒されながらも巧みにかわして、120万石の家領を保った。内政において優れた治績を上げ、治水や農政事業(十村制、改作法)などを行い、「政治は一加賀、二土佐」と讃えられるほどの盤石の体制を築いた。また御細工所を設立するなど、美術・工芸・芸能等の産業や文化を積極的に保護・奨励し、加賀文化の基礎を築いた。万治元(1658)年10月12日死去。享年66歳。墓所は石川県金沢市野田町の野田山墓地。

### ◇人物像

利常は鼻毛を伸ばしていた殿様として知られる。100万石という外様最大の領土を持っていたため、幾度も謀反の疑いをかけられたが、大阪城や江戸城の修築工事などを請け負い、幕府の改易攻撃をかわした。民政にも気を配った。

小松城での19年間(1639-1658)の業績はとて大きなものがある。小松の文化遺産や産業の礎を築き、小松発展の祖といわれている。利常は美術工芸や



小松城本丸 檜台

茶道・能などにも深く通じていたことから、城の増築、寺や神社の造営に美術工芸を中心に当時の名人・名工と称せられる人たちを数多く小松に招いている。産業分野においても、京都に人を送り、織物を研究させ、加賀絹の発展へと導いたり、九谷焼・瓦・茶・畳表なども保護奨励するなど、その貢献度ははかり知れない。

今も、金沢市内を流れる、辰巳用水は寛永8(1631)年に手がけた。城下の大火、金沢城類焼を契機に、小松の町人板屋兵四郎に命じて城水確保や市中防火を目的に引かせたのである。

#### ◇前田利常公灰塚

利常は、この国府にある三宅野台地からの眺めをたいへん気に入り、「もし、自分が死んだら、あの三宅野に火葬してくれ」と遺言したという。

この塚は令和2(2020)年11月5日に小松市指定文化財となった。



灰塚



灰塚

## 6. 勸進帳 かんじんちょう

### ◇歌舞伎「勸進帳」あらすじ ～小松の名所「安宅の関」でのエピソード～

源頼朝に追われ、山伏姿やまぶしになって奥州に落ちていった義経一行は富樫左衛門とがし さえもんが警固する加賀の安宅の関あたか所にさしかかった。

富樫に何者かと尋ねられた弁慶は、機転をきかせ東大寺の勸進かんじんの僧だと偽る。富樫が、それならば勸進帳かんじんちょうを読めと迫ったため、持っていた往来の巻物を取り出し読み上げる（勸進帳とは寺院神社建立の資金集めにその趣意しゆいをしたためたもの）。弁慶の必死の演技で通過の許可が下りたが、今度は荷物持ち姿の義経に疑惑が持たれた。

すると弁慶は「お前が義経と怪しまれるのはおのれのやり方がまずいからだ」と義経を打ちのめし疑いをはらそうとする。その弁慶の姿に心を打たれた富樫は、義経と知りつつ一行を見逃す。無事関所を通過すると弁慶は主人を打ちのめしたことを泣いて詫びた。



県指定史跡  
「安宅の関跡」石碑



安宅住吉神社



境内にある弁慶像



左から 義経・弁慶・富樫 三体像

#### ※豆知識

弁慶の智略と勇氣、富樫の仁義をたたえ、昭和15(1940)年に二人の銅像が建てられた。その後、平成7(1995)年に義経像が加わり、今は三人で「智仁勇」を表す形になっている。

## ひきやま こども かぶ き 7. 小松市の伝統「曳山子供歌舞伎」

### ◇曳山子供歌舞伎とお旅まつり 江戸時代

浜田町にある菟橋神社と本折町にある本折日吉神社、この両社の春季例大祭を「お旅まつり」と呼んでいる。小松城に隠居した加賀前田家三代前田利常寄進の神輿が大獅子、子供獅子とともに城下を巡行し、小松の繁栄を祈ったことが由来となっている。その神輿が渡り歩く様子を「旅」といい、「お旅まつり」の名称になったといわれる。

曳山子供歌舞伎は、利常が隠居後小松城に入城し、それに伴い、利常付きの武士とその家族、商人、職人などが小松に移り住み、一時は1万人近い城下町となり、今に伝わる様々な産業が発展した。特に、絹織物が小松に大きな富をもたらし、町人たちは文化を高めた。その町人たちの文化と財力、心意気によって始まった。文化14(1817)年に能美郡奉行所の小吏が書いた『螢のひかり』によれば、明和3(1766)年、龍助町と西町から始まったといわれている。

日本三大子供歌舞伎(長浜、秩父)としても知られ、現在は市内の八町が曳山を所有し、毎年当番の二町が上演を行っている。演ずるのは小学校6年生までの児童たち。当初は男子児童が演じていたが、戦時中に役者が女子に変わった。現在でも、女子が演ずるのが小松市の曳山子供歌舞伎の特色である。

### ◇日本こども歌舞伎まつり in 小松

小松市で平成11(1999)年5月15日、初の「全国子供歌舞伎フェスティバル in 小松」が開催された。

市民から約800件のアイデアや提案が寄せられ、集計してみると、約35%が曳山子供歌舞伎と勸進帳で占められており、この二つの素材を組み合わせることで、「地域おこし事業」に活かしていくこととなった。



「第1回全国子供歌舞伎フェスティバル in 小松」は、滋賀県長浜市、埼玉県おがの小鹿野町、当地小松の小学生による勸進帳が競演され、日本の子供歌舞伎全体のイメージアップを図ると同時に、「歌舞伎のまち小松」を全国に発信していこうという趣旨で開かれた。

第22回(令和元(2019)年)から、名称が「日本こども歌舞伎まつり in 小松」となった。毎年5月の恒例イベントとなっている。

## 8. 仏御前 一原町に残る仏御前の伝説

### ◇仏御前の生涯

#### ☆仏御前の誕生

永暦元(1160)年、原の里で堂守白河兵太夫の娘が誕生。  
その娘は、幼い頃から仏心が深く、いつも「南無阿弥陀仏」と口にしていたので村人から「仏」と呼ばれるようになった。



#### ☆仏御前、白拍子になる

その後、叔父の白河兵内の招きで上京し歌舞音曲を習い、白拍子となった。  
「仏」は大変な美少女で、歌にも舞にも優れていたため、白拍子として京に上ると、たちまち大評判になり、京一番の舞上手とうたわれるようになった。

#### ☆仏御前の夢

このとき、「仏御前」には一つの大きな夢があった。そのころ京には、祇王と祇女というとても美しい白拍子の姉妹がいて、姉の祇王は時の最高権力者である平清盛の愛情を一身に受けていた。その祇王と、清盛の前で、白拍子としての歌や踊りはもとより、女としての美しさも競い合ってみたかったのである。



#### ☆仏御前、平清盛の屋敷へ

そこである日、西八条の清盛の屋敷へ押しかけた。しかし、清盛は突然訪れた仏を無礼だと、追い返そうとした。これを聞き、仏は帰りかけたが祇王が横から、「まだ年端もゆかぬ者が、たまたま思い立って参りましたのを、あまり冷たく追い返されては可愛そうでございます。どんなに恥ずかしく辛いでしょう。私も同じ白拍子、他人事とは思えません。たとえ舞も歌もお召しにならずとも、せめてお目通りだけ許して、帰ってもらってはどうか。」と、とりなしてやった。そこで清盛もそれに応じた。

#### ☆仏御前、清盛の前で舞う

仏御前は清盛の前に連れ出され、ただ清盛1人のために歌い、舞った。清盛は仏御前を大いに気に入り、屋敷に残るよう命じた。(▼その時の今様)

君をはじめて見る折は 千代も経ぬべし姫小松  
御前の池なる亀岡に 鶴こそ群れみてあそぶめれ

意味：我が君(平清盛)を初めて見る時は、あまりにもご立派な

お姿なので、姫小松(仏御前)は千年も命が延びそうな気がします。君(平清盛)の前の池にある中島の亀山に鶴が群がっていて、楽しそうに遊んでいるようです。



## ☆祇王、清盛のもとを去る

仏御前にとって祇王は恩のある人なので、その祇王に遠慮して帰ろうとしたのだが、清盛はお許しにならず、それどころか「祇王を追い出せ」と命令した。そこで、祇王は唄を残してやむなく出て行くことにしたのである。（▼その時の今様）

燃え出づるも枯るるも同じ野辺の草  
いづれか秋に あわで果つべき



意味：春に草木が芽をふくように、仏御前が清盛に愛され栄えようとするのも(燃え出づるも)、私(祇王)が捨てられるのも(枯るるも)、しよせんは同じ白拍子(野辺の草)なのです。どれも秋になって果てるように、誰が清盛に飽きられないで終わることがありましようか。

## ☆仏御前、出家して清盛のもとを去る

祇王の代わりに清盛の寵愛を受けるようになった仏御前は、手に入れて初めて自分の夢のむなしさをこの世の無常とともに悟り、ひそかに屋敷を抜け出すと、自分で出家して祇王の元を訪れた。祇王母子も妹も恨みごと一ついわず、快く迎え入れ、4人で共に草庵にこもって仏道に励む日々が始まった。

## ☆仏御前故郷へ帰る

仏御前は清盛の子を身ごもっていることに気がついた。考え抜いた仏御前は晩春のある日、祇王に「加賀の国へ帰ろうと思います」と告げて、草庵を去っていった。仏御前は加賀国の原の里を目指して、京よりの長い道のりを歩き続けた。身重の体をようやく杖で支え、疲れきって石のように重くなった足を引きずりながら歩いていると、懐かしいきなめり木滑神社の鳥居が見えやっと石段のそばまで来ると、疲れが一気に襲ってきたのでそこでしばらく休むことにした。

## ☆子ども死産

思いにふけっていると、急に産気づいた。ちょうど通りかかった老婆の手を借り、その場で産み落とし、見ると子どもは死産であった。大きな心の支えを失った仏御前のよりどころは、故郷の原の里だけになってしまったのである。

## ☆原へ帰郷

ふるさとで草庵を作り、死んだ子の霊を弔うことが最後の望みであった。ところが、三年後の夏、如来様からお告げがあり、浄土往生の日が近いことを知った。仏御前は病も忘れて声を限りにお経を称え、念仏を続けたのである。安座合唱した仏御前は眠るように往生したのだった。

## ※その他 … 祇王が仏御前を慰めるために歌った唄

仏も昔は凡夫なり 我らもついには仏なり  
いづれも仏性具せる身を 隔つるのみこそ悲しけれ

意味：仏も昔は凡夫でした。我らも終いには悟りを開いて仏になれるのです。そのように誰もが仏になれる性質を持っている身ですのに、このように仏(仏御前)と私(祇王)を分け隔てるのは、誠に悲しいことです。

## 9. 芭蕉ゆかりの地

### ◇松尾芭蕉「おくのほそ道」の旅

松尾芭蕉は日本中を旅したといわれている。中でも弟子の曾良を伴いながらの紀行文「おくのほそ道」では、後世に残る数々の名句を残している。

### 江戸時代



### ◇松尾芭蕉

伊賀上野の城下赤坂街(現三重県上野赤坂町)に松尾与左衛門の次男として生まれる。

元禄2(1689)年3月27日(46歳)に奥州の旅に出て、東北、北陸をめぐり8月21日に終点大垣に着く。芭蕉が生まれた伊賀上野地方では、「松尾芭蕉」とは呼ばず、「芭蕉さん」と親しみを込めて呼んでいる。元禄7(1694)年、『おくのほそ道』清書本が完成。

芭蕉は、3月27日から弟子を連れて東北地方を回り、7月15日に金沢に入った。7月24日(陽暦9月7日)に小松に入り、3泊し、山中温泉で8泊した。そして、8月再び小松に戻り1泊した。8月に訪れた理由は、芭蕉は小松で生駒万子に逢うため、小松天満宮の別当梅林院能順(当時の連歌の第一人者)との出会いもあったという。

### ◇芭蕉が通った加賀路のルートについて



- ①金 沢 7月15日～7月24日
- ②小 松 7月24日～7月27日
- ③山 中 7月27日～8月5日
- ④那谷寺 8月5日
- ⑤小 松 8月5日～8月6日
- ⑥加 賀 8月7日～8月8日

旅に出たのは、元禄2(1689)年3月27日、46歳の時、陸奥・白河から仙台、石巻、中尊寺とめぐり、新庄を経て日本海側にぬけて、象潟まで北上、次いで酒田から新潟、金沢、北陸をすぎて、美濃大垣でこの旅をおえたのは8月の下旬。実に5ヶ月、約2,400kmにおよぶ道のりであった。

## ◇芭蕉句碑

### ☆小松天満宮（小松市天神町1）

前田利常が隠居して小松城にいたとき、小松城鎮護のため、日頃崇敬している菅原道真すがわらのみちざねを祭神とし、京都の北野天満宮を模して明暦3（1657）年、起工している。本殿・若の間・幣殿及び拝殿・神門神門、本殿、拝山殿が国指定重要文化財に指定されている。

また、十五重の石塔は、小松市指定文化財で、石材には金沢市坪野町で産出する良質の坪野石を用いている。

境内には芭蕉の句碑がある。

あかあかと日はつれなくも秋の風



### ☆菟橋神社・通称「お諏訪さん」（小松市浜田町イ233）

芭蕉は祭礼（西瓜祭）があることを聞き参拝している。境内には芭蕉の句碑がある。

志ほらしき名や小松吹く萩薄



### ☆建聖寺（小松市寺町94）

小松での滞在地の一つであったと推定される建聖寺に蕉門十哲の1人であった立花北枝たちばなほくしによる座像の芭蕉木像（座高18cm、横幅17cm、厚さ9.6cm）が残されている。

木像裏面には「元禄げんろくみのとし（元禄2年）、北枝ほくし謹これをつくるで作之」とあり、師の像を永遠に残すために丹精をこめて製作したことが伺える。

境内には、翁塚と句碑がある。

志ほらしき名や小松吹く萩すゝき



### ☆本折日吉神社・通称「山王さん」（小松市本折町1）

芭蕉が奥の細道の旅の途中、元禄2（1689）年7月24日（陽暦9月7日）小松に入り、近江屋という旅宿に泊まった。翌25日出立しようとしたが小松の人々に引留められ、小松山王宮神主藤村伊豆守章重（俳号こせん鼓蟾の館）に一泊し、同夜芭蕉はじめ曾良、北枝、歆生、塵生ら10人が催した山王会は有名である。

しほらしき名や小松吹く萩すゝき

露を見しりて影うつす月

芭蕉

こせん  
鼓蟾



「芭蕉留杖の地」の碑

☆<sup>ただ</sup>多太神社（小松市上本折町72）

寿永2(1183)年5月、倶利伽羅峠<sup>くりからとうげ</sup>の一戦で大敗を喫した平維盛<sup>たいらのこれもり</sup>を総帥とする平家の大軍は、加賀の篠原<sup>しのはら</sup>に再陣して抵抗を試みたが、木曾義仲軍の前に総崩れとなり都に逃走した。

この時、踏みとどまって白髪を黒く染め、若者に伍して奮戦し、手塚光盛に討たれた、斎藤<sup>さいとう</sup>藤当<sup>べつとう</sup>実盛<sup>さねもり</sup>は73歳であったと伝えられる。討ち取った首を池(現在の首洗池)で洗ってみると、黒髪はたちまち白髪に変わった。

実盛はかつて幼少の義仲を救った命の恩人で、義仲は実盛の首と涙の対面をし、懇ろに<sup>ねんご</sup>弔い、その着具であった甲冑<sup>かぶと</sup>を多太神社に納めた。この兜、大袖、臍当は国指定重要文化財に指定されている。

芭蕉翁一行が初めて多太神社に詣でたのが、元禄2(1689)年7月25日(陽暦9月8日)であった。7月27日、小松から山中温泉に向かう時に再び多太神社に詣で、それぞれ次の句を奉納した。

あなむざん <sup>かぶと</sup> 甲の下きりぎりす	芭蕉
幾秋か甲にきへぬ <sup>びん</sup> 鬢の霜	曾良 <sup>そら</sup>
くさずりのうら珍しや秋の風	北枝 <sup>ほくし</sup>

※「あなむざん・・・」の句は『卯辰集』(立花北枝)に見られ、「むざんやな・・・」の句は『奥の細道』に見られる。また、多太神社にはそれぞれを記した二つの句碑がある。



☆<sup>なただら</sup>那谷寺（小松市那谷町ユ122）

那谷寺は白山信仰の寺で、養老元(717)年、泰澄<sup>たいちよう</sup>によって開創されたと伝わっている。自生山岩屋寺<sup>じしようざんいわやでら</sup>と名づけられ、その後、寛和2(986)年に西国三十三番札所を開いた花山法皇が那谷寺と改名したと伝えられる。

芭蕉は、8月5日(陽暦9月18日)、山中温泉から北枝を伴って再び小松へ行く途中に那谷寺<sup>なだけい</sup>に参詣した。

石山の石より白し秋の風



## 10. 加賀蕉風の中心として活躍した たちばな ほくし 立花 北枝

### ◇略歴

- ・ 1640年頃～享保3(1718)年
- ・ 小松の松任町の通称研屋小路つうしょうとぎやしょうじに生まれる。
- ・ 本名次郎右衛門。一時は土井氏や森氏を名乗った。
- ・ 研刀業として生計をたてたという(通称 とぎや 研屋源四郎)。
- ・ 「奥の細道」紀行中の芭蕉と出会い、兄牧童ぼくどうと共に入門。福井県松岡まで同行することになる。
- ・ 加賀蕉風(加賀においての芭蕉の俳句の流れ)の中心として活躍した、蕉門十哲(芭蕉の門人の中で特に優れている十人)の一人。
- ・ 主な編著『山中問答』『卯辰集』『喪の名残』



北枝の碑：上野八幡神社（金沢市）

※北枝忌(5月12日)・・・享保3(1718)年5月12日 没。  
金沢卯辰山心蓮舎(金沢市山の上町)に葬られたという。毎年、子ども俳句大会が命日に開かれている。

#### ☆代表作

元旦や畳の上に米俵  
焼けにけりされども花は散りすまし  
書いてみたりけしたり果てはけしの花  
翁おきなにぞ蚊帳かやつり草を習ひけり  
さどん花に茶をはなたれる茶人哉かな

### ◇北枝と芭蕉

元禄2(1689)年、松尾芭蕉が加賀へやってきた。北枝は、金沢の俳人の仲間達とともに芭蕉を歓待した。金沢から松任・小松へと向かう芭蕉に、北枝は芭蕉の弟子の曾良とともにお供をした。小松に入った芭蕉は立松寺に詣でる。小松を発つ前に多太神社に詣で、それから山中へ行った。このときの様子が、『山中問答』に記されている。

北枝は、先を急ぐ芭蕉を、越前松岡の天竜寺まで送って別れた。芭蕉に従って25日間、北枝は片時もそばを離れることなく、師の全てを学ぼうとしたのである。芭蕉が訪れた翌年の深夜、金沢は大火に見舞われ、北枝の家も焼けてしまった。芭蕉はそんな北枝に見舞と激励の書簡を送った。北枝が大火の後で詠んだ句「焼けにけりされども花はちりすまし(私の家は焼けてしまったが、運のよいことに花がすっかり散ってしまった後だったので助かりました)」は、後に『猿蓑さるみの』に所収されたが、書簡では、この句を詠んだ北枝の詩心を賞賛することで励ましたのである。



北枝が彫った芭蕉木像(建聖寺蔵)

## 1 1. 小松を愛した連歌師 ばいりんいんのうじゅん 梅林院能順

### ◇略歴

- ・寛永5(1628)年～宝永3(1706)年
- ・江戸時代連歌界の第一人者(『俳諧大辞典』による)。北野天満宮学問所の初代連歌宗匠に選ばれる。
- ・京都北野天満宮の社僧、上乘坊能舜の四男として生まれた。78歳で生涯を閉じる。西町誓円寺に葬られている。
- ・北野天満宮社職と合わせて、明暦3(1657)年、小松 棧天満宮別当(梅林院)になった。

### ◇芭蕉、能順を訪ねる

元禄2(1689)年、『おくのほそ道』の旅で、小松を再訪した芭蕉は、生駒万子の紹介で、連歌師能順を訪れたという。その折、能順の歌『秋風は薄吹ちるゆふべかな』を巡って、2人の間に見解の相違が生じ、気まずい別れになったという話が残されている。

建部涼袋の『とはじぐさ』(1770年)によると、芭蕉が能順の歌を『秋風に』と詠じて褒めたところ、能順は『言葉にくらき人にておはせり』と書いて奥に入ってしまった。若い僧に理由を尋ねると、『秋風は』でなければ言葉の続きもたまりもよくないと呟っていたとのこと。

翌日芭蕉は、「さてあやまりつ『秋風は』とあらざれば下の七言とどのはざる物を」と書いて、能順の許に届けた。芭蕉の死に際して、能順が『風雅に遊ぶものは五十前後を限りと言ふべし』と言った言葉から、二人の間の確執は解消していたと思われる。

### ・連歌山の句碑(連歌山遺跡・小松市今江町共同墓地内)



能順は元禄15(1702)年、菅原道真の八百年遠忌などの神事を済ませ、75歳という老齢に達したことから、京都天満宮の辞職を申し出て50年にわたる京都と小松の兼任生活を終え、小松で暮らすことにした。

この作品は、能順が連歌山から白山を望んで詠んだもので、句碑には上句が刻まれている。

今一重雪もかすみの高根哉 (遠近の雪やむら山むら霞)

### ☆能順の残したもの

能順が残した功績は、北野天満宮社僧としてだけではなく、京都にあって連歌の第一人者として活躍すると共に、小松においては藩主を始め武士や町衆と多くの歌会を開き、かんしょう 歡生・ほくし 北枝など後世に名を残す弟子を育てた。

能順の没後、弟子の越前屋歡生によって能順連歌発句集が

『梅の霰』と名付けられ出版された。これを萬里小路卿から

靈元上皇にお見せし、『聯玉集』の名を賜ったという。この『聯玉集』(版本)は、小松天満宮に社宝として保存されている。能順は西町誓円寺に葬られた。尚、誓円寺墓地には能順以下梅林院歴代の墓がある。



(小松天満宮蔵)

## 12. 遊女の里 —串茶屋—

北陸街道の小松では、月津、串茶屋、龍助町に一里塚が造られた。その後、前田利常公が小松に隠居し、那谷寺を訪れて、その再建にかかる。工事を終えて帰り道、人々は串茶屋に立ち寄り、一日の疲れを癒したのである。婦女による飲食の給仕は次第に盛んになり、そのうち許可を得て、北陸街道随一のお茶屋として発展してきたのである。

この串村の北陸街道沿いに出来たお茶屋を“串茶屋”とも“茶屋串”とも呼ぶ。その後、寛政5(1793)年6月、串茶屋村として串村より分離独立したのが串茶屋の起こりである。

以後、文化文政の頃より、京都の島原の風習を学び、服装に錦織を用い、頭髮にべっこうの櫛笄を飾る等、昼夜弦歌の絶えない賑わいを見せ、島原に劣らぬ繁盛ぶりで全盛を極め、芝居小屋まで建てられた。串茶屋の遊女は俳句に和歌、生け花に茶の湯といった習い事や礼儀作法をしつけられて、教養あふれる気品高き存在として教育された。しかし、その後、明治5年、娼妓年明解放令で急速に衰え始め、更に、国道筋の営業禁止、並びに法律による営業一代制がしかれ、明治32(1899)年、約300年にわたる「串茶屋の廓」の歴史はついに幕を閉じたのである。

### ◇串茶屋民俗資料館（小松市串茶屋町甲30番地）

資料館には遊女に関する様々な資料が展示されている。

また、ここには「白山狛犬」と呼ばれるおかっぱ頭の狛犬が保存されている。



串茶屋に遊郭があった時代に、遊女達が正八幡神社に寄進したのだろうか。

### ◇遊女の墓

串茶屋の墓地は3回も場所を変えており、現在地に移されたのは享和4(1804)年～文政12(829)年の頃である。「遊女の墓」として個人単独の墓は全国的にも極めて珍しいことである。それに数多く存在しているのは串茶屋だけである。当時の遊女の死後の取り扱いは人間としては考えられないような哀れなものであった。

しかし、串茶屋の楼主や客は、養女としてその家の墓所に墓を建立して、菩提を弔ったのである。建立年月日や遊女名、年令なども意外とはっきりし、その数は30数墓が確認されている。その他楼廓



は壊されたり移転したりしていて、昔を偲ぶよしもないが、2、3件ばかりその面影が現存している。また、遊女を偲ぶ詩歌などが、わずかながら残っていることは幸いである。ここに「ヤッチン ドッコイ」といわれる歌と踊りが伝承されている。これは遊女品川と徳兵衛の「ヤンレンくどきぶし」で、「ヤッチン ドッコイ(それからどうした)」のあいの手が入り、単調、素朴な節回しの歌と踊りである。昭和40(1965)年、老人たちによってこの歌が唄われ、毎年7月15日の祇園祭りの輪踊りとして復活伝承されているが、今はその歌を歌える人も2、3人にすぎない。(参考文献「くしちややものがたり」の資料より)

## 13. 二つの鉱山

### ◇<sup>おこや</sup>尾小屋鉱山

尾小屋鉱山は能美郡尾小屋村(小松市尾小屋町)地内にあった。江戸時代の天和2(1682)年頃には金山として採掘されたことが文献に残っている。その後閉山となり、宝永年間(1704-10年)再び金の採掘を始めたが、生産量が少なかったことから、また廃山となった。

尾小屋鉱山が脚光を浴びるのは明治以降のことで、銅山としてであった。明治11(1878)年、能美郡金野村字金平に住む橘佐平が、西尾村字尾小屋小字松ヶ溝という地で鉱脈の露頭を発見、同11年、山岸三郎兵衛が



横山家経営期の尾小屋鉱山(本舗坑口)

試掘、ついで同13(1880)年、山岸と共同出資者の士族吉田八百松ら7人も試掘を始めたものの資金が乏しく、利益をあげるまでにはいたらなかった。吉田は士族の誼<sup>よしみ</sup>で苟完社を訪ねた。

苟完社は横山隆平(加賀前田家家老横山家13代)を代表とする金融会社であった。対応に出た完社の役員横山隆興(隆平の弟)は吉田への出資に強い感心を持ち、隆平に尾小屋鉱山の検分を奨めた。この後まもなく、隆平は吉田らとともに共同出資者となった。明治14(1881)年隆平は本格的に鉱山経営に乗り出し、鉱業権の一切を買い取り、隆平が社主、隆興が鉱山長として鉱山の経営にあたった。このときの負債は20余万円(日銀の換算指数によると現在の約5億円)に達したという。その一方、鉱山産出の荒銅の販売と融資にあたる円三堂を設立



木製の補強材(支保)で囲まれた坑道

し、横山の鉱区事務所である隆宝館と契約した。円三堂の名称は、横山の旧臣であった第十二銀行支配人の辰巳啓・向島幸助・岡部立三郎の三人が、旧主家横山の鉱山事業が円滑に成就するようにとの願いから名づけられたという。

後に、隆宝館尾小屋鉱山と称されたが、経営は芳しくなく、会社設立当初の銅産量は一ヶ月6トンにすぎなかった。鉱長の横山隆興はすでに全財産を投資し、無一文の状態であったという。明治18(1885)年、小松

町に出張所を置き、隆興みずから指揮をとり、新鉱脈発見に力を注いだ。

明治19(1886)年、待望の新鉱脈が発見された。その結果、「鉱口より運び出される産銅は累々として山の上に山を築き」、「歓喜に満たされた全山の人気は、一挺の鶴嘴に食ひ入」(渡辺霞亭「横山隆興翁」)るようであったといい、「採掘せる粗鉱の含銅は平均百分の四、五」(同上)であったという。年間の産銅は20余万円、横山本家の負債、円三堂の負債を返済しても利益が残った。翌明治20(1887)年から事業は順調に進展し、鉱区面積も30余万坪<sup>ヘクタール</sup>(90ha余)となり、さらに富鉱脈数カ所を発見し、産銅は6~7トンから10トンを維持できるようになった。

明治28(1895)年には、岐阜の平金鉱山を買収してさらに順調な経営をみたが、明治29(1896)年8月、大洪水によって鉱山の全施設を流失し、一時存亡の危機に陥った。しかし、

日清戦争後の好景気に支えられて回復、その後、月生産量は30トンから40トン余となり、明治32(1899)年には濾過池を新設、鉱区が100万坪(300ha)を超えるまでになった。

明治34(1901)年には人力選鉱を機械選鉱とし、明治36(1903)年には洋式精練法を採用し、年生産高は1000トンを超えた。明治37(1904)、平金鉱山(岐阜県)のを合わせて横山鉱山部を創設、明治43(1910)には鉱山部事務所が金沢市大手町9番地にできた。

日露戦争後は、不況のため一時的に生産量は減ったが、明治43(1910)年阿手鉱山の買収にともない、同鉱山が保有していた水力発電により諸施設も電力化し、明治44(1911)年には年間生産量2000トンを超え、大正9(1920)年には2276トンに達した。最高鉱夫数1700人、山間の町でありながら人口も5000人を数えた。また大正8(1919)年には、小松と結ぶ尾小屋鉄道も開通した。

第一次世界大戦後の大正9(1920)年、不況下に友愛会尾小屋支部ができ、待遇改善を要求して400人余がストライキを行った。同年11月25日には60人が、大正11(1922)年4月には5日間、また5月、7月にもストライキが行われ、石川県最大規模の労働争議へと発展した。その原因について「石川県の百年」の著者橋本哲哉氏は、「横山鉱業部の労務対策の前近代性・遅れ」にあると指摘している。その後、尾小屋鉱山経営は行きづまりをみせ、昭和6(1931)年、横山家は鉱山を手放す(宮川鉱業に売却)にいたった。こうして、横山家経営時代は終わりを告げた(以後、日本鉱業株式会社、北陸鉱山株式会社と経営母体を変えながら続いた)。

やがて、良質鉱の枯渇、製錬コスト上昇、外国から安価な銅の輸入増大などにより、次第に経営が悪化し、昭和37(1962)年3月31日、製錬の火が消え、尾小屋鉱山の製錬所が廃止となった。次いで同年9月1日には日本鉱業株式会社から新たに分離独立した北陸鉱山株式会社が経営を継承したが、9月30日には尾小屋鉱山本山が閉鎖された。

その後は、尾小屋鉱山本山から離れた大谷支山(大谷坑・金平坑)を中心に、採鉱・選鉱のみの操業が行われたが、昭和46(1971)年12月30日、尾小屋鉱山の全面廃止となり、その長い歴史を閉じることになった。



尾小屋鉱山資料館外観



尾小屋鉱山メインロード入口



尾小屋鉱山夫の歌



作業の様子(江戸時代の様子)



作業の様子(昭和時代の様子)

ゆうせんじ  
◇遊泉寺銅山

現在の小松市鶴川町の山中に、発見された銅山。地名をとって、遊泉寺銅山と呼ばれた。

金沢市立玉川図書館所蔵加越能文庫の「金平村遊泉寺鍋谷村金山濫觴」によれば、安永5(1776)年に、能美郡沢村の石黒源次、徳橋組十村役の埴田村半次らが、採掘の許可を加賀藩に願い出たのが始まりとされている。その後天明5(1785)年から休山するも、文政3(1820)年に藩直営の銅山として再開する。



最盛期の遊泉寺銅山

しかし、経営権は藩と住民とで交互し、明治維新後も安定せず、鉱業権は転々と譲渡された。経営が近代化して拡張したのは、土佐(高知県)出身の竹内綱(コマツの創始者である竹内明太郎及び戦後首相となる吉田茂の父)が、明治35(1902)年に鉱山権を買収した以後である。



真吹炉跡



精錬所跡の大煙突

明治35(1902)年、経営は竹内明太郎が当たり、全国各地で起こした鉱山の経営経験を生かし、この銅山の開拓に乗り出した。採掘を人力より機械化するために、鳥越村に神子清水発電所を建設、小型溶鉱炉真吹法を採用した電気分銅所を設置した。明治39(1906)年4月に遊泉寺- 鉱山口間に馬車鉄道開業。明治40(1907)年11月に小松-遊泉寺-鉱山口間および加賀八幡-金屋支線からなる遊泉寺銅山専用鉄道(軽便鉄道 約8 km)が全通した。明太郎の近代的な経営により業績を上げ、遊泉寺は鉱山町として賑わった。大正5(1916)年頃には、鉱域114万坪、生産高612トン、従業員1600人を数え、家族を含めると5000人の鉱山町が出現するに至った。そのため、病院、郵便局、小学校、百貨店、魚屋、料理屋、質店、呉服店等あらゆるものが軒を並べ、山中の一都会をつくりあげた。

大正6(1902)年に鉱山機械製造の「小松鉄工所」を設立し、翌年には「工科青年学校」を附設し、多くの機械技術者を養成した。大正10(1921)年に竹内鉱業遊泉寺銅山の機械修理部門だった「小松鉄工所」が分離・独立して「小松製作所」を立ち上げた。

しかし、第一次世界大戦後の不況や鉱毒問題のため農民との間に度々対立が起こるなど、経済環境の変化から大正9(1920)年に閉山となり、その役目を終えた。廃山となってからは鉱山町としての繁栄も失われた。



遊泉寺銅山ものがたりパーク  
(里山みらい館)

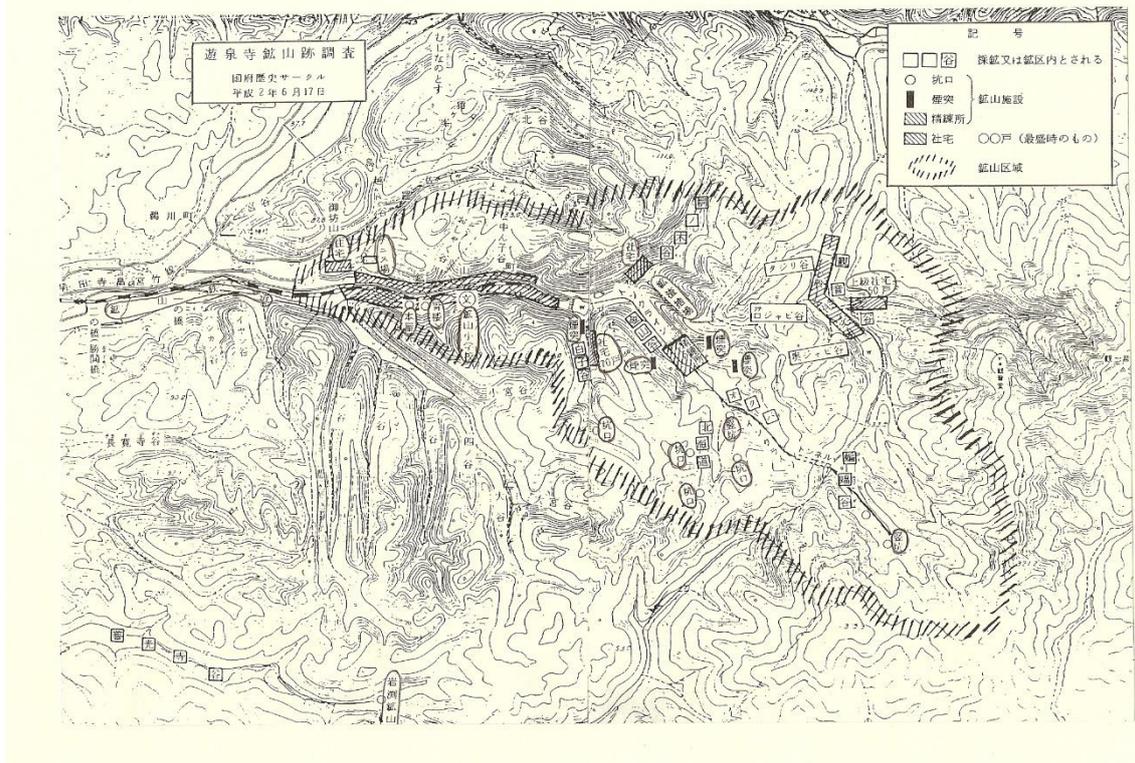


遊泉寺銅山精錬所町並図

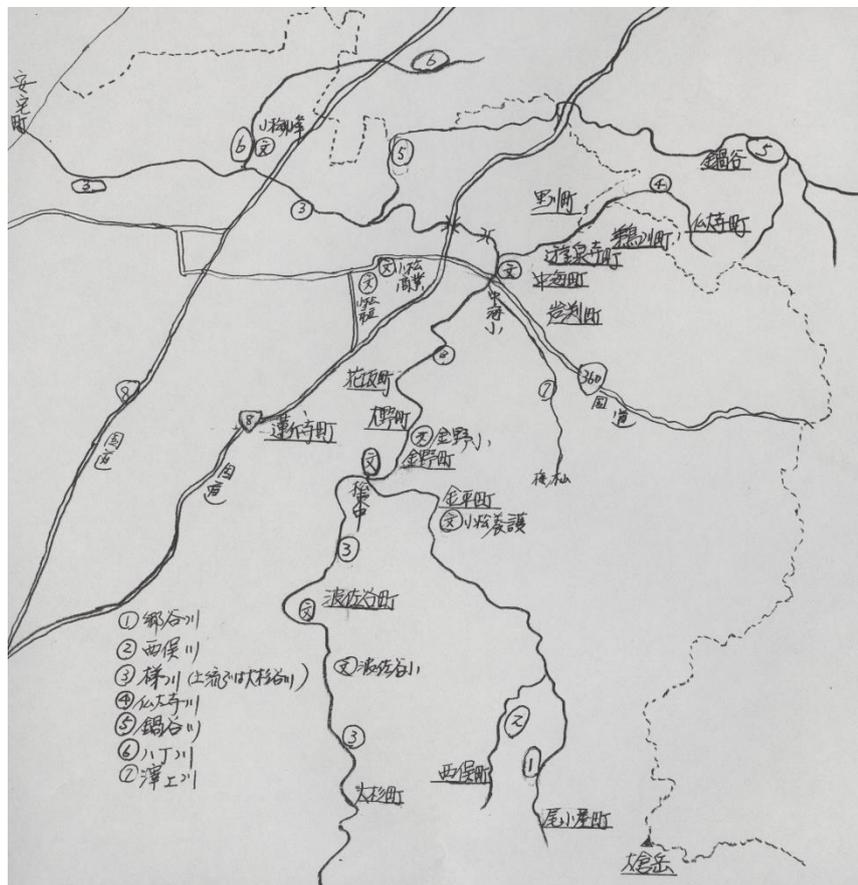


竹内明太郎像

### 遊泉寺鉢山町の地図



### 梯川流域の地図



## ◇農用地土壌汚染—小松市梯川流域の重金属汚染問題—

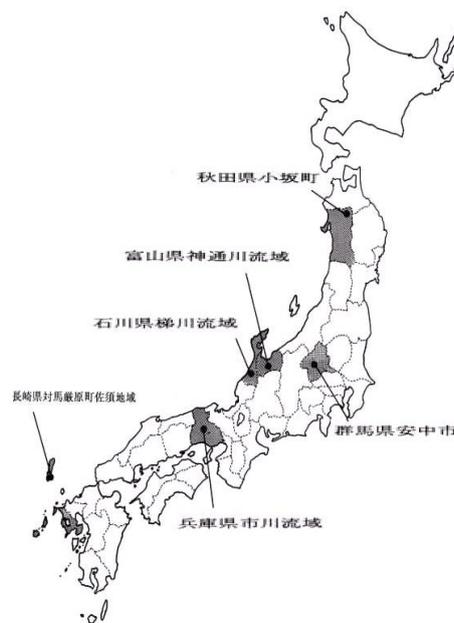
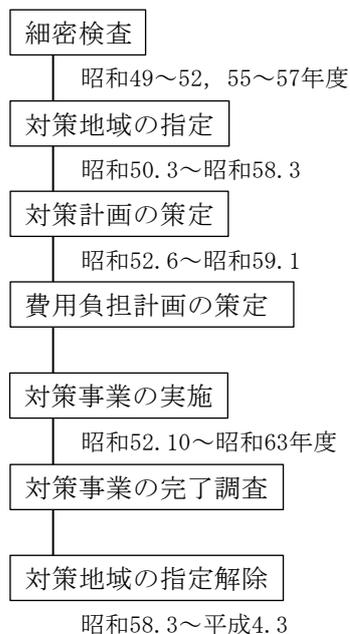
カドミウム等の有害物質による農用地の汚染は、農作物の生育阻害及び農作物汚染により人の健康を損なうおそれがあり、農用地の土壌汚染等に関する法律に基づき、政令により重金属類のカドミウム等が「特定有害物質」に指定され、農用地土壌汚染対策地域の指定要件が定められている。

小松市の梯川流域の重金属汚染問題は、昭和43(1968)年9月に行われた名古屋鉱山保安監督部による梯川の重金属汚染調査をきっかけとして問題が表面化した。さらに、昭和45(1970)年5月、尾小屋鉱山下の梯川流域の農用地の産米から1.0ppm(ppmは百万分率、百万分の一という極めて少ない量)以上のカドミウムを含むものが多く検出され、また、梯川中部河川水から基準値(0.01ppm)を上まわる0.012ppmのカドミウムが検出された。一方、小松市梯川流域農用地の重金属汚染の原因は、上流の旧尾小屋鉱山(昭和46年12月閉山)の採掘に由来していることが、昭和49(1974)年～50(1975)年度に実施された学識者による梯川流域汚染機構解明委員会の各種調査で結論づけられた。

昭和52年(1977)年からカドミウム汚染田の客土による土地改良事業も着手され、昭和61(1986)年には、その約半分の225ヘクタールが指定解除された。

平成4(1992)年、小松市のカドミウム汚染田や導水路で最後まで汚染地区として残っていた25.8ヘクタールが、石川県公害対策審議会土壌部会で指定解除となり、17年ぶりに全地区で汚染に終止符が打たれた。

また、旧尾小屋鉱山の坑廃水については、その水質は年々改善されつつあるものの現在も鉱害を発生するおそれがあるため、坑廃水の処理を実施している。国、県、小松市では、坑廃水処理事業者に対して、その経費の一部を補助することで費用負担の適正化と休廃止鉱山に係る公害の防止を図っている。



## 14. 二つの鉄道

### ◇<sup>おこや</sup>尾小屋鉄道

尾小屋鉄道は、小松と尾小屋鉱山までも結ぶ、全線非電化、762mm軌間、全長16.8kmの軽便鉄道であった。

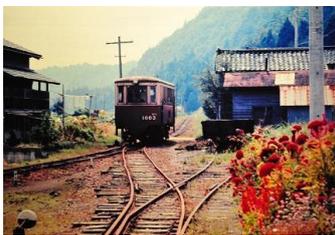
新小松から始まり、西吉竹－吉竹－遊園地前－花坂－西大野－大杉谷口－金野町－金平－沢－塩原－波佐羅－観音下－倉谷口－長原－尾小屋の16駅間(起終点駅含む)を走っていた。

尾小屋鉄道は、明治時代に採掘が本格化した尾小屋鉱山の粗銅、鉱石、鉱山用資材などを運ぶために、大正9(1920)年5月10日、新小松駅－尾小屋駅を結ぶ鉄道として開通した。当初は人力や馬車などで事足りてはいたものの能率は上がらず、トラック輸送などは考えられなかった当時、鉄道による輸送が望まれたのは当然の事だった。鉱石輸送だけでなく、鉱山労働者・沿線の住民の「生活の足」としても大いに利用された。多いときは、年間100万人超の旅客があり、運行本数は1日に14往復もあった。



駅名	駅間キロ	営業キロ
新小松駅	-	0.0
西吉竹駅	2.7	2.7
吉竹駅	0.4	3.1
遊園地前駅	1.0	4.1
花坂駅	1.3	5.4
西大野駅	0.9	6.3
大杉谷口駅	0.9	7.2
金野町駅	0.5	7.7
金平駅	1.3	9.0
沢駅	1.7	10.7
塩原駅	0.5	11.2
波佐羅駅	0.9	12.1
観音下駅	0.7	12.8
倉谷口駅	2.0	14.8
長原駅	1.1	15.9
尾小屋駅	0.9	16.8

The table shows the train schedule for the Oiwake Railway. The title is '車内乗車券 甲A 1426-084'. The columns represent stations from Oiwake to Shin-Komatsu. The rows represent different train services, with times listed in minutes.



大正年間には 5,000人もの人口を擁した尾小屋だったが、やがて昭和不況がやってきて経営は悪化、鉱山は日本鉱業に身売りし、鉄道は「尾小屋鉄道」として昭和8(1919)年に再スタートした。ところが戦後になり道路事情が良くなったこともあって、銅の輸送は昭和30(1955)年にトラック化、尾小屋鉄道の貨物列車は、大幅に減少してしまう。また、昭和32(1957)年に鉱石輸送がほぼ廃止となってからは旅客輸送が中心となった。

採算悪化により日本鉱業は昭和37(1962)年に尾小屋から撤退。銅の採掘は北陸鉱業を設立して引き継いだ。精錬部門は閉鎖され、尾小屋鉄道は名古屋鉄道の系列下におかれた。

日本鉱業の撤退により尾小屋が過疎化、沿線の人口も希薄とあって、乗客は大幅に減った。昭和46(1971)年尾小屋鉱山閉山。閉山後は運転本数がだんだん減っていき、一旦はボーリング場やドライブイン経営も手がけてはみたもののボーリングブームは去り、北陸自動車道の開通でドライブインのあった国道からトラックは減って、どちらも撤退の道を歩んだ。



結局、尾小屋鉄道は廃止の運命をたどることになり、昭和52(1977)年3月19日、その年の豪雪のため尾小屋－倉谷口間が不通のまま最後の日を迎えた。遊覧用に作られた西武山口線を除くと、旅客営業を行う非電化の軽便鉄道としては日本国内で最後まで残った路線であり、廃止の際には注目を集めた。なお、当鉄道を経営していた尾小屋鉄道株式会社は、鉄道廃止後に小松バス株式会社と社名を変更、令和3(2021)年7月に加賀温泉バス株式会社と合併し、北鉄加賀バス株式会社となった。

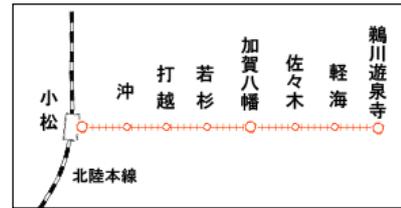
## ◇遊泉寺鉄道（後の北陸鉄道小松線）



さよなら電車

遊泉寺鉱山の鉱石搬出用軌道が小松～遊泉寺間に敷設されていたが、大正9(1920)年ごろの閉山で軌道は遊休施設となっていた。

大正12(1923)年ごろになって、この軌道を利用して電車を走らせる計画(小松から金名鉄道(後の北陸鉄道金名線)釜清水に至る)が持ち上がり、大正15(1926)年3月22日、敷設免許状を得て同年11月20日、資本金65万円の白山電気鉄道(株)(取締役社長 鈴木源平 ほか67名の発起)を設立した。軌道は竹内鉱業から払い下げを受け、昭和2(1927)年から工事に着手した。



昭和4(1929)年5月15日、小松～遊泉寺(昭和6年、鶴川遊泉寺と変更)間3.6マイル(約5.9km)が営業を開発したが、同年12月には破産宣告を受ける程経営は不振を極めたため、当初計画していた鳥越村を經由して白峰村までの延長は、実現されずに終わった。そのころ、地元や鳥越の山持ち(羽振りの良い地主)達が先行投資し失敗に終わり、一家離散の憂き目にあった事実もある。

昭和12(1937)年11月4日、社名を小松電気鉄道(株)と改め、半額減資を行った。また、昭和20(1945)年5月25日の臨時株主総会で北陸鉄道への営業譲渡が決議され、同7月に北陸鉄道小松線となった。



昭和61年5月31日、北鉄小松線は57年の歴史に幕を下ろした

小松商業高校前の佐々木駅



鶴川遊泉寺鉄道跡に植えられた桜並木

路線距離が5.9kmと短い上に、沿線には特に観光施設等もなく極めて地味な路線だったが、沿線には高校が2つあり、乗降客数が減少しても他の路線とは違って廃止とならずに維持されてきました。しかし昭和61(1986)年5月31日に、昭和4(1929)年から数えて57年間の歴史を閉じることとなった。

鶴川遊泉寺駅跡は空き地となっており、樹齢90年以上とされる桜(う川古代桜)が植えられている。また、廃止代替バス(旧小松バス、現在の北鉄加賀バス)の停留所名も鉄道駅時代の鶴川遊泉寺となっている。

### ☆補足

昭和20(1945)年、鶴川遊泉寺駅から能美線の加賀佐野駅へ延長して同線と接続する計画が立てられた。第一期工事として河田駅までの工事が行われ、中間には埴田駅が設置される予定だったが、開業に至らぬまま中止され、既に完成していた路盤は放棄された。駅から延びる築堤と車止め付近の線路の終点部分が北方を向いてカーブしていたのはその名残である。

## 15. 公選による初の小松市長 わだ でんしろう 和田 傳四郎

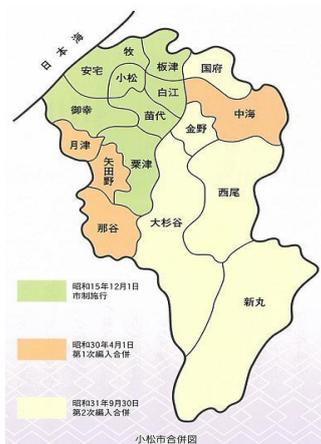
### ◇略歴

(『ふるさと小松の人とところ』より)

- ・明治10(1877)年～昭和45(1970)年
- ・和田家は、八日市地方総代(旧小松町の3分の1を預かる大庄屋格)で、代々大百姓として名字帯刀が許される家柄で、小松町土居原(現小松市土居原町)の大加登屋三代和田傳四郎の長男として生まれた。
- ・明治39(1906)年、日露戦役の叙勲で勲七等旭日青色桐葉章、金鵄勲章功七級が授与される。
- ・昭和4(1929)年、小松町会議員に初当選、町議を3期11年間務める。
- ・昭和5(1930)年、小松ガス会社社長に就任。
- ・昭和22(1947)年、市長選に初当選し、公選による初の市長(歴代では2代市長)となる。以後、昭和38(1963)年に退職するまで、4期16年の長きに渡って小松市長を務める。
- ・昭和39(1964)年、第1回生存者叙勲で、自治功勞により勲四等瑞宝章が授与される。
- ・昭和45(1970)年、小松市第1号名誉市民となる。



### ◇「大小松」の建設—小松市長としての功績



昭和25(1950)年、傳四郎は、戦後不況のどん底にあえぐ小松製作所(現コマツ)の救済に乗り出す。当時の小松市年間予算の約20%に相当する3千万円の資金援助をし、小松製作所を中心とした企業城下町の危機を救った。

傳四郎が願ったのは、ひとえに小松の発展、いわば「大小松」の建設だった。そのためにまず着手したのは、県都金沢と肩を並べる一大都市を南加賀に打ち立てるための近隣村々との合併だった。昭和31(1956)年の新生小松市は、20万人都市の目標には遠く及ばなかったが、人口51,000人から88,000人となり、現在の人口10万人を超える市の原型となった。

昭和33(1958)年、80歳の傳四郎は、「飛行場を基地と民間航空の空港と併用すれば発展疑いなし。わしゃ、ご覧の通り老いばれじゃけど、百年の大計じゃと考えます。宇宙時代じゃということをご認識ください」と自慢のひげを震わせながら力説し、航空自衛隊小松基地開設の調査受け入れを提案した。市議会は賛成多数で可決、3年後に基地は開庁式にこぎつけた。傳四郎のねらいは、基地誘致により国に滑走路を整備させ、民間空港の都市として小松を発展させることだった。

そのほか、市立小松総合病院や全国トップクラスの施設となる小松市公会堂の完成、市立女子高等学校の開校、学校の防音化工事、北陸エアターミナルビル、末広体育館、ゴミ焼却場の建設、市営総合卸売市場の開設など数多くの市民に親しまれる事業をやったのけた。

傳四郎の強烈な個性は、議員生活18年、市長16年の計36年の奉職で、戦前から戦後にかけての小松の発展、いわば「大小松」の建設に活かされたのである。

## 16. 歴代の市長

### ◇市制施行 昭和15(1940)年12月1日

- 初代小松市長 … 山口 又八 (昭和16年1月14日 ~ 昭和22年1月16日)
- 2代 〃 … 和田 傳四郎 (昭和22年4月5日 ~ 昭和38年5月1日)  
※公選による初の市長
- 3代 〃 … 藤井 栄次 (昭和38年5月2日 ~ 昭和42年5月1日)
- 4代 〃 … 佐竹 弘造 (昭和42年5月2日 ~ 昭和47年7月25日)
- 5代 〃 … 竹内 伊知 (昭和47年8月6日 ~ 昭和55年8月5日)
- 6代 〃 … 竹田 又男 (昭和55年8月6日 ~ 平成4年8月5日)
- 7代 〃 … 北 栄一郎 (平成4年8月6日 ~ 平成9年3月15日)
- 8代 〃 … 西村 徹 (平成9年4月13日 ~ 平成21年4月12日)
- 9代 〃 … 和田 慎司 (平成21年4月13日 ~ 令和3年4月12日)
- 10代 〃 … 宮橋 勝栄 (令和3年4月13日 ~ 現在に至る)

### ◇歴代小松市長の所信

**初代 山口 又八** … 新市の機構整備からかからなければならない。それには、各町村より申し受けた未決の事業等、市制実施にあたって、旧町村の連絡審議で協定した事項から、行って行かねばならぬが、すべては文化の進展を眼目として諸政策を遂行しなければならない。誠意翼賛体制下の市民の期待に副うべく、臣道の実践に向かって微力を尽くしたいと思っている。

**2代 和田 傳四郎** … 市民の声を市政の上に盛りたてて民主政治を行っていききたい。6万市民の真に住みよい小松市建設のため、一身をなげうって努力していききたい。

**3代 藤井 栄次** … 明るい愛の市政をモットーに広く意見を聴き、地域格差をなくし、全市域が平等に恩恵を受けられるよう進めたい。

**4代 佐竹 弘造** … スローガン「公私混同のない市政づくり」  
市長は市民の代表であるという気持ちで、自らを正していききたい。市政の執行に当たっては、公平で明るく、力強い市政づくりをしたい。

**5代 竹内 伊知** … 小松市の主人公は全市民であり、その一人ひとりが行政の舵とりである。また市政のご意見番でもある。社会福祉、環境づくり、教育、産業、地域開発、ファントム配備など、全市民の意見を反映させて行政を推進する。

**6代 竹田 又男** … 市政に活力を取り戻すために、職員の士気と積極的な行動力で当たりたい。そして、市政の基本である快適な生活、豊かで潤いのある地域社会づくりの施策を推進し、運営していききたい。

**7代 北 栄一郎** … スローガン「さわやか市政、元気あふれる小松を」  
肩書きのない人を大切にし、あらゆる層の市民の皆さんの声に耳を傾けます。クリーンで、公平・公正な市民に開かれた市政、対話第一のさわやかな市政をめざします。

**8代 西村 徹** … スローガン「元気ではつらつ、小松の新生」

市政に対する信頼回復の第一歩は、「正直で、素直で、オープンであること」。真心のこもった市政、温かい気持ちが通う市政にしていきたい。そのためには、市民が主役の市政、より開かれた市政をめざしていきたい。

**9代 和田 慎司** … 一人一人の幸せを応援し、強い小松を作ります。民間の感覚でまちを経営します。小松市を北陸の新都心「国際都市こまつ」へ成長させたい。成長・産業・改革・くらし・夢と5つのテーマで進化させます。

**10代 宮橋 勝栄** … まず目の前の課題である新型コロナ対策に全力で取り組みます。

「市長の退職金2000万円」をゼロにし、大胆な財政出動で、市民の皆さまの命と暮らしを守ります。

**参考文献一覧**

小松のあゆみ

- ・『感じる、こまつ』

古墳 こまつ遺跡ガイドブック

丹羽長重 ウィキペディア（フリー百科事典）より

うつくしま電子事典より

前田利常

- ・見瀬和雄『利家・利長・利常 前田三代の人と政治』（2002年3月北国新聞社）
- ・磯田道史『殿様の通信簿』（2006年6月 朝日新聞社）

勸進帳

- ・<http://ataka-no-seki.or.jp/>

曳山子供歌舞

仏御前

松尾ゆかりの地

- ・<http://e-tel.tel.jp/column/bashou/>

遊女の里 一串茶屋

- ・資料「くしちややものがたり」（串茶屋民族資料館）

二つの鉱山・二つの鉄道

取材協力者：中 梅子さん

国府町史・鶴川町史・昭和以前北こまつ・北陸鉄道のあゆみ・小松市史

和田傳四郎

- ・地域教材作成研究会『ふるさと小松の人とこころ』（小松市教育センター、2006年3月）

歴代の市長

- ・『小松市政五十周年記念誌』、『広報こまつ』